

## 主要魚種の食性から見た宍道湖と中海の環境

越川敏樹（ホシザキグリーン財団環境修復プロジェクト）

宍道湖と中海を行き来し、かつともに多く生息する魚種（6種）の食性から両水域の餌環境を探ってみた。（スズキ・コノシロ・ボラ・サッパ・ヒイラギ・マハゼ）結果、宍道湖は利用される餌生物の種類数が少ないのに対して、中海はより多くの種類が餌として選択されていた。

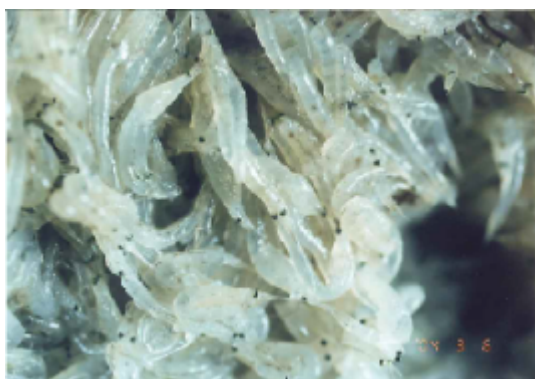
宍道湖では、カイアシ類、ケイソウ類、アミ類、小型巻貝が多くの魚に利用されていた。

一方、中海では、カイアシ類とケイソウ類は共通して多かったが、他にヨコエビ類、二枚貝及びそのプランクトン幼生、多毛類、コツブムシ等の底生動物が利用され、食性の幅が広がった。

しかし、アミ類に関しては、宍道湖に比べて格段に少なかった。

アミ類の存在は、それを利用する魚が多く、もともと多く生息していた中海の生態系にとって、大きな影響があるものと推測される。

また、これらの魚の餌生物は、両水域共に湖底とその直上に生息するものが多く、高水温期に広がる湖底の貧酸素の影響を強く受けるものと思われる。



アミ類（イサザアミ）